

かつて十和田湖は人の踏み入れが困難で、修験者が信仰の対象としていた神秘的な湖だった。十和田湖が全国的に知られるようになったのは、当時人気の総合雑誌『太陽』に、詩人として随筆家として有名な大町桂

月が、1909（明治42）年に十和田紀行「奥州一周記」を発表してからである。この十和田紀行は『太陽』の主筆（編集長・論説者）で、五戸町出身の鳥谷部春汀が十和田湖のすばらしい景観を、読者を通して

あるほどだった。1921（大正10）年、アメリカのナショナルパーク制度にならい、国立公園候補地の調査が行われた。国内の景勝地は全国的な関心を呼び、1927（昭和2）年に毎日新聞社の前身である東京日日新聞と大阪毎日新聞が「日本新八景選定」を主催し、ハガキによる各地の風景の人気投票が行われた。

沢村には文書や電信・電話などで問い合わせが増えていった。その際、村名の「ホウオクサワ」を「法奥沢」と正確に表記せず誤字や誤信が多かった。また、十和田湖の地元のため「十和田村」と記すところもあった。法奥沢村の村名は、1889（明治22）年に法量・奥瀬・沢田の3か村合併で成立し、各村から1字取ったものである。

町（現鹿角市）となった。神秘の湖「十和田湖」は、国立公園として日本有数の観光地となり、近隣の歴史と伝統を持つ市町村名を改称させる影響を持つようになったのである。日本が国立公園制度を制定したのは、インバウンド（訪日外国人旅行者）を増やし、外貨を獲得することにあつた。十和田湖を世界に誇る観光地として位置づけようとしたわけである。「十和田」に名称変更した自治体には、世界中からインバウンドを迎え、「十和田湖」が世界の観光地になるよう努力した、先人らの歩みがあったことをあらためて知って欲しい。

### 自治体名を変えた「十和田湖」の知名度

宮本 利行

（青森県立三本木高等学校教頭）

このため法奥沢村は、十和田湖の知名度の高まりと、十和田湖の地元であることを全国に認知してもらうため、1931（昭和6）年に村名を「十和田村」と改称。さらには1975（昭和50）年には「十和田湖町」と改めた。十和田湖の知名度が高まると、十和田村に隣接する三本木町は、市制施行を遂げた翌年の1956（昭和31）年、三本木市から「十和田市」へと改称した。また、秋田県側では十和田湖に隣接する鹿角郡毛馬内町と錦木村が合併。1955（昭和30）年に「十和田

多くの人が知ってもらった。桂月に持ちかけた企画だった。紀行文を読んだ嘉仁親王（のちの大正天皇）が、十和田湖に興味を覚え、当時青森県知事だった武田千代三郎に問いかけたエピソードが

このとき十和田湖は、青森県をあげたハガキ投票運動が展開され、湖沼部門で入選を果たした。1928（昭和3）年には十和田湖と奥入瀬溪流が名勝・天然記念物に指定され、1936（昭和11）年2月には国立公園に指定されて全国に知られる観光地となっていた。十和田湖の知名度が全国的に高まると、地元の法奥

ちなみに、十和田市中心部の学校には旧称「三本木」の名称が残っている。三本木中学校、三本木農業（恵拓）高校、そして筆者の勤務校であり、もうすぐ創立100年を迎える三本木高校などである。十和田市民には「三本木」に対する歴史と伝統を大切にすることが失われていないの

だろう。



発荷峠から見た十和田湖  
=1950~60年代・青森県史デジタルアーカイブスより

東京と青森山 660号  
東京青森県人会 2023年4月